

国際言語としての英語を教える

—— 日本の英語教育が志向すべき英語とは？ ——

Teaching English as an international language: What kinds of English should be taught in schools in Japan?

三 村 浩 一

帝塚山学院大学

Koichi Mimura

Tezukayama Gakuin University

Abstract: This article discusses how English as an international language should be taught in elementary to high schools in Japan. English is now a means of communication among people from different backgrounds. In this kind of interaction, culture-biased expressions should be avoided for intelligibility reasons, for example. Also, native English speakers and non-native speakers are required to be tolerant of a variety of English. With these considerations, the author calls for a shift in English education in schools in Japan. Instead of aiming to create speakers as close as possible to native English ones, school teachers in Japan should encourage students to be speakers with their own identity who are motivated to use English as an international language.

Key words: English as an international language, elementary to high schools, intelligibility, culture-biased, tolerant, identity

1. はじめに

2020 年から実施される新しい学習指導要領では、小学校 3 年生から外国語活動を週当たり 1 コマ、5 年生から教科として、週当たり 2 コマ教えることになっている。これは日本の英語教育史上では画期的な変化である。背景にあるのは急速なグローバル化であると言えるだろう。審議会のまとめには「グローバル化の中で世界と向き合うことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美徳やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。(中略) 外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる¹⁾」と書かれている。「外国語」を英語に限定していないが、現行の小学校学習要領では「外国語活動に

においては、英語を取り扱うことを原則とする²⁾」と明記してあることから、実質的には英語である。「多様な人々」とは英語を母語とする人だけではなく、第2言語としてや外国語として話す人々を含むと解釈できる。

その英語は現在においては多様化している。母語としての英語にはイギリス英語、アメリカ英語などがあり、第2言語として使われている英語にはインド英語、マレーシア英語などがあり、外国語として使われる日本人英語などがある。このような時代に日本の英語教育はどのような英語をモデルとして教えるべきなのだろうか。現行の学習指導要領には「現代の標準的な英語によること。ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること³⁾」とあるのみで、具体的にどのような英語を目標にするかは教科書の執筆者の判断に任されていると言ってよい。もちろん教科書検定があるので、最終的には文部科学省が判断することになるが、教科書執筆者としての筆者の経験からしても、検定のプロセスで大きな変更が加えられることはない。

このような状況では、教科書の執筆者、大学入試問題・各種検定試験の作成者などが、どのように英語を捉えているのか、どのような英語をモデルに選ぶかが日本の高校までの英語教育に大きな影響力を持っていると言える。本稿は、筆者が考える日本の教育が目指す英語を提示して、その観点から現在の英語教育、英語教材を検証しようとするものである。

2. 英語は世界でどのように使われているか

まず、議論の前提として、英語が現在世界でどのように使われているかを見てみよう。少し古い資料であるが、Crystal が世界に広がっている英語の実態を分析したものがある。Crystal は Kachru (1985) の同心円のモデルを有用だとして援用している⁴⁾。すなわち、

1. Inner Circle (内円)：伝統的な英語の本拠地で、英語が第1言語。アメリカ合衆国、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド。3億2千万から3億8千万人。
2. Outer Circle (外円)：英語が早い段階で広まった地域。国の主要機関で使われてきており、「第2言語」として重要な役割を果たしている。シンガポール、インド、マラウイなど、50以上の地域。3億～5億人。
3. Expanding Circle (拡大円)：国際言語としての英語の重要性を認識している国々。中国、日本、ギリシャ、ポーランドなどで増加の一途をたどっている。英語は外国語として教えられている。5億～10億人。

以上の数字（あくまで推定である）からわかるように、最大で20億近い人口がなんらかの形で英語に関わっており、英語は国際言語（an international language）であることに疑問の余地はないだろう。また、英語を使ったコミュニケーションは同じ円の中だけではなく、Inner Circle と Outer Circle、Outer Circle と Expanding Circle いったように、複雑なチャンネルで行われる。

話される英語も標準的なアメリカ英語やイギリス英語だけでなく、英語を母語としない話者が話す様々な英語が使われている。國弘は40年以上も前の著書で「英語が単にイギリス人の母国語、アメリカ人の母国語であることをすでにやめて、現実に世界共通の意思疎通の手段となりつつあるのです」、「英語を母国語とする人たちも、非常に聞きとりにくい外国人の英語を理解しよう」と努力をしなければならないと述べている⁵⁾。また、河原もアジアの英語をつぶさに観察して、「非母語の英語話者が自分たちの話す英語を社会的に威信の低い変種として捉える必要はない。このような視点を基軸として、アジアにおけるさまざまな英語の存在の意義を理解することができる⁶⁾」と述べている。日本人も日本人英語を堂々と話して、アイデンティティを示せばいいのである。

Outer Circle や Expanding Circle で話される英語はその文化や言語に影響されて、発音や文法が変容する。国際コミュニケーションに大きな支障となる変容に対して寛容や理解を求めるのは難しいかもしれないが、例えば、日本人は時として、That restaurant is delicious. (あの店はおいしい) と言うことがあるが、これは、Helen is sharp. (ヘレンは鋭い) と同じメタファー基盤をもっており、ネイティブに通じないと言われているが、日本人英語の独自性の一つであり、正す必要がないと本名が主張している⁷⁾ が、その通りだと思う。細かな語法に過敏になる必要はないのだ。国際コミュニケーションにおいては多様な英語への寛容性を持つ必要がある。本家であるイギリス英語や分家であるアメリカ英語の優位性に固執したり、英語を母語とする者の模倣に汲々したりする態度は捨てなければならない。

3. 国際言語としての英語とは

英語が国際言語の一つ (English as an international language=EIL) であることには議論の余地がないだろう。だが、その実態は何であろうか。これがそうであるというコンセンサスはまだないし、議論も決着がついていないし、決着がつくものでもないかもしれない。鈴木は「国際補助語としての英語は実体を持ったものではなく、各種多様の英語が、参加者相互の間で、あれこれと混じりあって使われ、それが全体として、この場のコミュニケーションを成立させているという、複雑な状態を指す用語なのです⁸⁾」と説明している。鈴木 of 言いたいのは、国際コミュニケーションの場で意思疎通可能な英語のバリエーションの総称が国際補助語であり、アメリカ英語、インド英語、マレーシア英語、日本人の話す英語すべてを指すと考えられる。

このような国際言語としての英語という認識に基づく英語教育は、多様な英語に優劣をつけるのではなく、それぞれの変種を尊重して、その背後にある文化も認め、英語を国際コミュニケーションの道具として使うことを想定したものでなければならない。また、何をモデルにするかという共通認識はまだないと言える。日本ではアメリカ英語やイギリス英語をこれまでにモデルにしてきたし、これからもモデルにすべきだという意見が強いが、カナダやオーストラリアの英語でもかまわないのである。例えば、TOEIC[®] のリスニングテストのナレーションはアメリカ人、

イギリス人、オーストラリア人、カナダ人の4者が担当しているのも、特定の英語の種類を絶対視しない方針として歓迎できるものである。

また、JET プログラムで、海外から招致された ALT（外国語指導助手）の数は、非英語圏も含めて、2016 年 7 月現在、4,536 人である。その要件として、「現代の標準的な発音、リズム、イントネーションを身に付け、正確かつ適切に運用できる優れた語学力を有していること。また、論理的に文章を構成する力を備えていること⁹⁾」とあり、必ずしも母語話者でなくてもいいこともあり、世界 40 カ国から来日しており、ジャマイカから 105 名、南アフリカから 85 名、フィリピン共和国から 37 名など、学校現場でも英語の多様性を経験できる環境になっている。

Inner Circle に属する英語種の発音をモデルに様々な英語間のわかりやすさ (intelligibility) を分析して、コアとなるものを特定して、それを国際英語のモデルとしようとする試みも行われている。しかし、エスペラントが広がらなかったように、人口的な英語を構築しても生産性はないだろう。Crystal は英語が拡散して、相互理解不可能になることを懸念して、World Spoken Standard English (WSSE) なるものの台頭を予言し、その生成過程ではアメリカ英語がもっとも大きな影響力を持つと言っている¹⁰⁾。拡散を防ぐために影響力のもっとも強いアメリカ英語を軸にしながら、具体的に何をコアにしていくのかは難しい問題ではあるが、方向性としては間違っていないと思う。

4. 文化をどう扱うのか

言語と文化の関係については様々な議論があるが、文化から切り話された言語というのは存在しえないというのが一般的な理解ではないだろうか。しかし、切り離せる文化もあるのではないか。例えば、英語では聖書やシェイクスピアやマザーグースなどからの引用がよく使われるが、それを理解するためにはそれなりの文化的素養が必要になるので、非英米文化圏同士でのコミュニケーションでこのような共通基盤をベースにする必要があるとは思えない。あるいは、体の部位を使った慣用句である pull one's leg（からかう）などは表現としては面白いかもしれないが、non-native には負担となる。さらに、基本動詞にしてもそのコアの部分を捉えて、適切に使うのは難しい。例えば、He runs the restaurant. は He manages the restaurant. で代用できる。また、基本動詞を使った動詞句 (make up, give off など) も覚えるのが負担である。鳥飼も同様に主張をしており、「少なくとも、目に見える表層的な文化を無自覚に教えることを避け、英米文化の真似を強要することは排除できます¹¹⁾」と述べている。日本人英語でいいと主張する國弘でさえ、長くアメリカで教育を受けたためであろうか、文化の相対性を主張しながらも、アメリカの文化にこだわる。foreigner は「何か油断にならぬ他所者、というニュアンスがきわめて強く、(中略)『皆さんがた外国人』というのを You foreigners などと訳しては、相手の憤激をかう以外のなものでもない¹²⁾」と母語話者の肩を持つ。この程度のミスは國弘 (1970) も述べているようにアメリカ人が広い心で受け入れるべきである。

本名は「英語は、多くの人々が国際的、異文化間状況のなかで、自分の文化を表現し、かつ他国の多様な文化を学ぶための言語であるということが出来ます。私たちは英語をそのように認識するならば、英語を英米文化と結びつけて考える必要はありません¹³⁾」と断言している。

5. 日本人が目指す英語とは

日本の英語教育には「ネイティブ神話」と呼べるようなネイティブ崇拝が根強く残っている。その証拠に「ネイティブが教える英文法」や「ネイティブはこう言わない」などと銘打った書籍が人気を博している。ネイティブに近づくという目標は聞こえがいい。だが、ネイティブ以外とも英語でコミュニケーションをとる機会が多くなった今では、その目標は現実性に乏しいと言わざるを得ない。発信においては accuracy よりも fluency を重視すべきである。特にネイティブが共有する文化の理解を前提とした慣用表現を発信レベルで使う必要があるのかどうか再考の余地がある。

鈴木は「日本の英語教育の主目標を、アメリカ英語でもイギリス英語でもない、国際補助語としての英語に切り換えるべきだ¹⁴⁾」と主張しているが、どの英語をモデルにすべきについての提言はない。国際社会で日本人が話す英語が通じれば、それが国際補助語ということなのだ。本名は日本人英語を次のように定義している¹⁵⁾。

- 日本人英語学習者が中学校、高等学校、そして大学で獲得した英語の知識とその運用能力を基礎にして生み出す英語パターンのこと。それは音声、音韻、統語（文法）、意味、そしてプラグマティクスにまたがる。
- それは日本市民が仕事、あるいはその他の営みで英語を使うときの基礎になり、各人はそれを基礎にして自分の目的に合った語彙、表現、構文などを積み上げていくことができる。

英語が Inner Circle から Outer Circle, Expanding Circle とその使用が拡大し、日本人が英語を使って行うコミュニケーションの対象も様々な英語話者に広がりつつある中、インプットの面では英米に限定するのは時代にそぐわない。ALT ではすでにその傾向が強くなっているが、教科書にも Inner Circle 以外の英語話者を登場させて、音声にも触れさせることが必要ではないか。

次に、アウトプット面でどの英語を音声面のモデルとするかであるが、これについては学習指導要領で「現代の標準的な英語による」と定めているので、Inner Circle の英語であればどれでもいいが、教育現場での ALT の数や、教材が用いている英語の実態からして、アメリカ英語かイギリス英語のどちらかが妥当だと考える。国際言語の英語がお互いから大きくずれてしまって、わかりやすさ（intelligibility）が下がってしまうのを回避するためには、Inner Circle の英語をモデルとするのがよい。国際英語の音声面の専門家である Jenkins も同意見である¹⁶⁾。ただ、縮約形や音の変容に過敏になるすぎる必要はない。非 Inner Circle の英語話者とのコミュニケーションにとって阻害要因になる可能性があるからだ。例えば、次のような縮約形や音の連続は、

英語を正確に聞き取るには必要であるかもしれないが、少なくとも高校レベルの一般の英語教育では聞き取りにすら必要だとは思わない。

縮約形： going to → gonna, want to → wanna

音の連続： fell out of the tree → felloutof the tree

センター試験のリスニングはそのことを心得ていて、縮約形や音の連続、変容などはあまり提示していない。

ただ、どの英語を目指すにしろ、音声面で特に注意すべき点は、英語は子音が連続したり、子音で終わったりすることがあるということだ。また、同じように思われる子音でも強さが違う。筆者もかつてアメリカ人に自分の名前（mimura）と言った時に、imura? と返されたことがあったが、同じ m でも英語の m は日本語より強い音であることをあとで知った。日本人式の発音でいいと考えずに、Inner Circle 以外の英語話者にも通じるように、個々の発音については初期の段階からしっかり学習させたい。鳥飼も高校留学した際に、didn't の発音に苦労したと述べて¹⁶⁾、子音の連続の重要性を訴えている。

社会言語学的な適切さについては、従来から英米の基準をモデルとしてきたが、国際言語としての英語という観点からはこれも見直しが必要であろう。例えば、自分の名前を英語風に Taro Yamada という必要があるだろうか。自らのアイデンティを大切にする国際英語の立場からは Yamada Taro で通すべきである。また、アイコンタクトやジェスチャーも英米風に合わせる必要はない。そもそも国際コミュニケーションでアイコンタクトやジェスチャーに依存するのはあまり意味がない。丁寧表現についてはある程度の知識が必要であろうが、例えば、八木は次のような例文を上げて、「Will you …? はわれわれが学校や参考書で学ぶ以上に命令口調です。音調によっては脅しにすらなります¹⁷⁾」と言っているが、表現の細かなニュアンスを教えて、使用にあたって留意するように指導することにどれほどの意味があるだろうか。

Will you open the window?

Would you open the window?

Could you open the window?

Could you please open the window?

Would you mind opening the window?

最近、コミュニケーション・ストラテジーとか表現の適切さを重視する傾向があるが、国際コミュニケーションにおいては、相手の表現適切さが自分の英語の基準からして可笑しいと思われる場合でも、寛容の心で接することが必要である。

6. 国際言語としての英語の観点からの英語教材論

さて、最後に、国際言語としての英語の観点から、現在学校で使われている教科書や大学入試センター試験の問題を検討してみたい。

6-1 小学校の外国語活動で使われている『Hi, friends 1』文部科学省（2012）

2012 年度から文部科学省が全国の公立私立の小学校に無償で配布している補助教材であるが、1 は 5 年生、2 は 6 年生対象の実質的な教科書と見なしてよいだろう。楽しみながら英語や日本及び外国の文化を学べるような工夫がなされている。ひとつ気になったのは、Book 1 Lesson 2 の Let's Play である。ジェスチャーが絵で提示されて、それがどんなことを表しているかを、選択肢から選ぶ活動であるが、このジェスチャーはすべて英語圏のものである。学習指導要領の「言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること¹⁴⁾」を踏まえての活動であると思われるが、日本人がこのようなジェスチャーを真似る必要はない。ジェスチャーがコミュニケーションの重要な要素であることは言うまでもないが、異なる文化を持つ者同士のコミュニケーションで英語圏のジェスチャーを規範として使う理由はない。むしろジェスチャーに頼るのは誤解を生む危険性がある。学習指導要領そのものの問題も孕んでいるのではないか。

6-2 中学校で使われている『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1』高橋他（2012）

2016 年度の採択数が第 3 位の教科書である。主な登場人物は日本人、アメリカ人、中国人、オーストラリア人、インド人、イギリス人と多彩なバックグラウンドの間で、英語が様々な背景を持った人の間でのコミュニケーションの道具であることを教えようとしている。さらに、英語で日本文化を発信するというコンセプトも貫かれている。学習指導要領の「外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと」という指針を忠実に教材に反映させているように思われる。日本人の姓名の表示も、伝統的な名→姓ではなく、姓→名になっている。国際共通語としての英語を使う場合は当然のことである。

6-2 高等学校で使われている『Element English Communication I』卯城祐司他（2013）

英語コミュニケーション I の教科書でもっともよく使われているものの一つである。リーディングを中心とした総合的な教科書であるが、リーディングの素材は文化論や環境問題や戦争問題など生徒の関心を引きそうなものを平易な英語で綴ったものであり、特定の文化に偏ることなく、また、文化を背景とするような表現は少ない。文化の扱いで気になる点があるので、それを紹介したい。Lesson 3 の素材は Nisbett（2004）の一節を改作したものであるが、タイトルが How Asians and Westerners Think Differently となっている。本文ではアメリカ人、中国人、韓国人、ヨーロッパ系アメリカ人、アジア系アメリカ人の物の見方を比較している。Asians として登場するのは中国人と韓国人、Westerners として登場するのは、アメリカ人だけであり、これでなぜ西洋人とアジア人の考え方の議論になるのだろうか。特に、アメリカ人＝西洋人というような印象

を植え付けることはよくない。一昔前の教材にはこのような観点がよく見られたが、そろそろ脱却したい観点である。

6-3 大学入試センター試験の英語

2016年度の大学入試センター試験の受験者は約54万人で、高校卒業生が約100万人であるので、大学進学者のかなりのかなりの数が受験することになる。したがって、高校の教育内容にも大きな影響を与えている。例えば、2006年に英語にリスニングが導入されてからは、高校現場でリスニングの強化に力を入れるようになった。センター試験の英語はおおむね良問揃いで、学習指導要領から逸脱しないように、また、検定教科書の内容にも気を配って、時間をかけてじっくり作成されているような印象を受ける。国際共通語としての英語を意識しているのかどうかははっきり見えてはこないが、文化的な面でも英米に偏るということはほとんどない。

1990年代は会話問題の選択肢に4つのことわざがあり、文脈に適したものを選ばせるというのがあったが、現在では影を潜めている。リスニング問題の第4問のBに、That would kill two birds with one stone！ということわざがあるが、このことわざは日本語に移植されているので、理解に困難ということはないが、できたら避けたい表現である。ことわざや熟語はそれにふさわしい文脈で使うと表現に潤いのようなものを与えるが、文化を基盤にするようなものは高校レベルまではできるだけ控えたい。例えば、筆記の第5問（久しぶりにストーリーが復活した）には、amount to much（成功する）、bills kept piling up（請求書がたまっていった）があり、設問とは直接関係がないにしても、他のもっとわかりやすい表現で表せるのではないか。リスニングの第1問にはI don't really care for biology.（生物はあまり好きじゃない）があり、これは解答に関係する。I don't like biology very much. で十分意を尽くせる。

7. まとめ

英語が国際語としての地位を不動のものとなっており、日本人が英語を使って様々な背景をもった人々とコミュニケーションを行う機会は、日本企業のグローバル化、日本人の海外旅行者の増加、来日外国人の急増といった情勢の中、今後増え続けるとものと予想される。そのような事態を踏まえ、日本の英語教育は今まで以上に「国際語としての英語」という観点から、4技能を高める方向に行かなければならない。

また、どのような英語を目指すかという点では、国際英語の拡散を防ぐという意味で、発音面ではアメリカ英語やイギリス英語をターゲットにしながら、英米の文化に根ざした表現をできるだけ使わずに、また、社会言語的にもジェスチャーや適切さも追従せず、日本人のアイデンティティを表に出した、堂々と意見を述べる態度を涵養すべきである。文法においても日本的なエラーに過敏にならず、相手にわかってもらうことを第一とすべきである。

だが、「日本人英語でいい」という開き直った態度もよくないと思う。まずは、スモールクラス

や ALT のさらなる導入などの教育環境を整備し、様々な文化に対して寛容で、日本文化についても英語で語れる話し手を養成しよう。

注

- 1) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm
- 2) 文部科学省（2008: 13）
- 3) 「高等学学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf
- 4) Crystal（2012: 100）
- 5) 國弘（1970: 12-13）
- 6) 河原（2016: 126-127）
- 7) 本名（2013: 40-41）
- 8) 鈴木（1999: 56）
- 9) JET プログラムホームページ <http://jetprogramme.org/ja/>
- 10) Crystal（2012: 102）
- 11) 鳥飼（2011: 140）
- 12) 國弘（1972: 139）
- 13) 本名（2013: 87）
- 14) 鈴木（1999: 58）
- 15) 本名（2013: 144）
- 16) Jenkins（2000: 18）
- 17) 鳥飼（2011: 20-21）
- 18) 八木（2007: 25）

参考文献

- Crystal, David（2012）*English as a Global English London*: Oxford University Press.
- 本名信行（2013）『国際言語としての英語——文化を超えた伝え合い』東京：富山房インターナショナル
- Jenkins, Jenifer（2000）*The Phonology of English as an International Language*: Oxford University Press.
- Kachru, Braji.（1985）Institutionalized second-language varieties. In Sydney Greenbaum（ed.）, *The English language today*. Oxford: Pergamon.
- 河原俊昭（2016）「東南アジアの英語——フィリピンとマレーシアの事例から——」『国際理解 42

- 号, 2016, pp.125-128』
- 國弘正雄（1970）『英語の話しかた』東京：サイマル出版会
- 國弘正雄（1972）『国際英語のすすめ』東京：実業之日本社
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版
- 文部科学省（2012）『Hi, friends 1』東京：東京書籍
- Nisbette,Richard（2004）*The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why*. New York: Free Press.
- 鈴木孝夫（1999）『日本人はなぜ英語ができないか』東京：岩波書店
- 高橋貞雄他（2012）『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1』東京：三省堂
- 鳥飼玖美子（2011）『国際共通語としての英語』東京：講談社
- 卯城祐司他（2013）『Element English Communication I』大阪：啓林館
- 八木克正（2007）『世界に通用しない英語』東京：開拓社